

# 赤壁

前

ワキ 黄州の傍の人

シテ 老人

後

ワキ 前に同じ

シテ 鶴

地は 唐土

季は 七月

ワキ詞

「是は唐黄州の傍に住居する者にて候ふが。こゝに赤壁山とて名所の候。是は古へ東坡居士の遊興せられたる処と申し候ふ間。此度思ひ立ち一見せばやと存じ候。

サシ

「頃は初秋の十日あまり。残る暑さの甚しければ。まだ夜をこめて東雲の。

歌

「影ともに。思ひ立つなる旅衣。く。聞きし名所ながめんと。野暮れ山暮れ里暮れて。行けば程な

シテ一声

く名にし負ふ。赤壁に早く着きにけり。く。  
「古へを。思ひ出づるの悲しきに。泣けども空に。  
知る人ぞなき。

ワキ

「如何に是なる老人。御身は此処の人か。

シテ

「さん候此処に年久しく住む者にて候。

ワキ

「処の人にてましますば。名所旧跡教へて賜はり候へ。

シテ

「安き間の事御尋ね候へ教へ申し候べし。

ワキ「まづ西に見えたる県は何と申し候ぞ。

シテ「あれは江夏県と申し候。

ワキ「さて又東に当つて。山川相繆つて木深き陰の見えたるは。如何なる処にて候ふぞ。

シテ「あれこそ武昌県と申して。古へ魏の武帝の。周郎にたしなめられし処にて候ふさりながら。武帝は文武の達者にて。其荊州を破りし時は。千里に舟を浮べ旌旗空を蔽ふそのみか。矛を横たへて詩

を賦し給ひし人なれども。今は昔になり果てゝ。故もゆかりも亡き跡や。

ワキ「さて其後に東坡居士。暫く舟を浮べつゝ。遊び給ふも此所か。

シテ「中々なれや黄州に。流され給ひし其昔。世上の憂きを忘れんと。しばゝ来りて舟を浮べ。

ワキ「月の友人諸共に。

シテ「或は詩を賦し歌を歌ひ。

地

「夜遊をなして夜もすがら。く。酒を挙げ客に属し。文を書く粧ひ。其才超然と越え勝れ。たぐひ稀なる智識なり。誠に塵を出で俗を絶ち。雲に乗り風を御す。神仙の境界も。かくやと思ひ知られたり。く。

ワキ詞

「猶々東坡居士の赤壁を賦せられしやうを御物語り候へ。

クリ地

「昔元豊の頃。初秋の今宵うらなき友を誘ひ。同じ

く舟を浮べて赤壁に遊ぶ。

サシ

「折しも風そよくと来て波もなく。

地

「酒を挙げて諸共に。明月の詩を口ずさび。窈窕の章を歌ふ。

クセ

「暫くありて。月は東の山の端に。ほのぐと晴れやかに。星のまにく立ち渡る。身に白露のおのづから。江に横ぎりて水の光。空色にまじはる。蘆の折葉の。おのがまゝにや流るらん。風和らか

に吹き送り。とゞまる方も知らばこそ。飄々と世を忘れ。仙を得たるが如くなり。盃も重なれば。舷をたゝいて。謡ひ奏で戯るゝ。桂の櫂蘭の楫。そことなく棹さして。波のうねく押し渡る。心も空に面白や。

シテ「其中に客人。笛竹を調べつゝ。

地「歌に和らげて。吹き合はせく。其声の妙なるや。恨むるが如く又。慕ひ泣くに異ならず。余音よわ

くと。絶えざる事。糸筋のいと深き。深谷の底の鱗も。やゝ立ち舞はんばかりなり。ひとり漕がるゝ海人小舟。綱手悲しむ理り。誠知られて客人も。盃を洗ひて。夜もすがら共に汲む程に。東雲もしらくと。はやあさまにやなりなん。

ワキ詞「かやうに委しく語り給ふ。御身は如何なる人やらん。

シテ「今は何をか包むべき。我は夢中の道士なるが。今

宵の月の面白さに。姿をかへて来りたり。

ワキ「そもや夢中の道士とは。さてはそのかみ東坡居士の。後の遊びに伴ひし。玄裳縞衣の仙禽なるか。さあらば後の遊びの有様。是また語り給ふべし。

シテ「げにく後の遊びといふも。同じき年の十月の望。

ワキ「雪堂よりも臨臯に。帰りし時の事かとよ。

シテ「折ふし霜露既に降りて。木の葉も落ちて月清く。

ワキ「風も涼しき夕暮に。二人の友は網をあげて。魚を

得たりと喜べば。

シテ「東坡は之を見るよりも。酒はありやと婦に問へば。

ワキ「中々の事斗酒ありと。

シテ「聞くよりも又。

ワキ「赤壁に。

地「遊べば流れも声ありて。く。切岸も高く聳え。

万代も尽せぬ巖に。登り嘯けば。山も鳴り谷響き。

すさましければ立ち帰り。又舟に取り乗り。風の

まにくたゞよひて。歌ひ楽しむ折から。我も来りて舞ふなり。暫く待たせ給ふべし。誠の姿顕はさんと。いふかと見れば其人は。其まゝ見えずなりにけり。く。(中入)

ワキ詞

「さては只今の老人は。疑もなく赤壁に。住みて久しき仙禽なるぞや。」

歌

「今とても。忘れず来鳴く老鶴の。く。昔の名をも名乗りける。その言の葉を違へどと。夢も結ば

ず待ち居たり。く。

後ジテ

「漢に叫んでは遙に驚かす孤枕の夢。風に和してはみだりに入る五絃の弾。」

地

「すはや此夜も半ば過ぎて。四方の気色も淋しきに。風に臨んで盤旋と飛びめぐる。姿は車輪の如くなるが。天を響かす千代の声々。まのあたりなる奇特かな。」

ワキ

「不思議やな月も隈なき水の面に。東より来るもの

を見れば。玄裳縞衣の仙禽なり。其名に聞えし舞をまひ。夜すがら我に見せ給へ。

シテ「仰に随ひ舞はんとて。翅を伸べて拍子にあて。

ワキ「戛然と鳴いて。

シテ「舞ふとかや。千年ふる。鶴の住むなる江の水は。

地「波の立つさへのどかなり。（舞）

地「舞の羽衣ひるがへし。く。幾千世までも限らじと。くりかへしく舞ひ遊べば。二人の友も立ち

去りて。東坡も眠りに就き給へば。赤壁の楽しみ塵外の遊び。是までなりといふかと思へば。岩根の松に飛びかけり。岩根の松に飛びかけて。雲井遙かにあがりけり。